

ヘルダーリンの書簡における「火 (Feuer)」の概念 について

棚瀬, 明彦
九州大学大学院言語文化研究院

<https://doi.org/10.15017/5553>

出版情報 : 言語文化論究. 20, pp.1-12, 2005-02-28. 九州大学大学院言語文化研究院
バージョン :
権利関係 :

ヘルダーリンの書簡における「火 (Feuer)」の概念について

棚 瀬 明 彦

I.

ヘルダーリンは、1791年12月3日の土曜日、チュービンゲン神学院にあって、火災に遭遇している。この火災について彼は、妹のリーケ (Rike) に宛てた手紙で詳しく説明している。¹⁾

「この前の土曜日、午後9時過ぎに修道院で火災が発生した。それは旧館の、長い間まったく使われていない離れたところにある部屋で、藁がいっぱい置かれていた。たぶん、通りかかった人の持つ明かりの火花が飛び移ったのだろう。(と言うのも、その部屋には扉がなかったからだ)、それで、もうもうたる煙が修道院をおおって広がった。」「ちょうどぼくが訪れていた旧館のある部屋で、突然あるフランス人が、彼はぼくたちの〈火事だ!〉と言う言葉を知らなかったが、大声で叫んだ。ぼくたちは部屋の外へ出て、彼と一緒に階段を下りた。」「ぼくたちは階段を下りると、廊下の端のところ、すでに火がその部屋から吹き出しているのを見た。」そのあと彼は、他の人たちが消火活動をするのを仲間と一緒に手伝う。間もなく火は消えるが、「しかし煙は、ちょうど火の出た上の階に、長い間、強く立ちこめていたので、火が床の中に潜んでいるかも知れないと、あちこち破ってみたが何もなかった。見張りが夜通し立った。」とある。

一方、ヘルダーリンは、後期の讃歌、1803年成立と推定されている「イスター」の冒頭で次のように歌っている。²⁾

Jetzt komme, Feuer!	今こそ来るがいい、火よ!
Begierig sind wir	われらは熱望している
Zu schauen den Tag,	その日を見るのを、

また、これとほぼ同じ時期に、同じく讃歌「ムネーモシュネー」の冒頭でも次のように歌っている。³⁾

Reif sind, in Feuer getaucht, gekochet
Die Frücht und auf der Erde geprüft und ein Gesez ist
Daß alles hineingeht, Schlangen gleich,
Prophetisch, träumend auf
Den Hügeln des Himmels. ...

熟しているのだ、火の中に沈められ、煮られて
これらの果実は、大地の上で試練を受けて、掟なのだ、

すべてが、蛇に似て、
 予言的に、天の丘々の上で
 夢見ながら、入っていくのは。…

ここで使われている「Feuer」という語は、記号表記としては手紙にある火災の「Feuer」と全く同じである。しかしその意味内容については明らかに異なっているように思われる。火災における「火」は、それがわれわれに恐怖を呼び起こすような大きなものであれ、われわれにとって容易に制御できる小さなものであれ、日常的な「火」としてその意味内容を脳裏に思い浮かべることができるなじみ深いものである。それに対して、詩の中で使われている「火」は、それとは意味的にかなり大きなずれがあると思われる。同じ語が使われている以上、何らかの共通性、類似性はあるはずであるから、両者の関係は、いわばコノテーション（共示義）的な関係、すなわち何らかの意味関連性から派生する別の意味内容を持つと考えられる。「火」の比喩として一般的には心的な情熱とか情念とかに用いられるが、もちろんヘルダーリンの場合も例外ではない。さらに、上の詩で使われている語の使用法については、日常的な使用法とは全く異なっており、意味上における他の語との結びつきは、統語論的な観点から見ても日常的言語用法からは想像を絶してかけ離れている。そのような詩であるので、その意味の全容を解明することは容易ではないが、ここでは、「火」という語に絞って、日常的な「火」と詩における「火」とを意味的に結びつけるものは何かについて、とくに、日常的な語の使用が基本となっていると一般には考えられる手紙の中から探り出し、両者の「火」の落差を少しでも縮める糸口を見つけ出すことはできないであろうか。

II.

ヘルダーリンが、手紙の中で「Feuer」という語を使っているのは次の箇所である。⁴⁾

Feuer

- 072(5) : Lezten Samstag nach 9 Uhr Abends gieng Feuer aus im Kloster.
 072(16) : wir schon am Ende des Ganges den wir erreicht hatten, Feuer zu der
 072(19) : und durch Feuer und Rauch war schon mein guter Rotaker
 072(23) : um Wasser, denen die im Feuer standen wenigstens so viel möglich
 072(25) : schrien um Hülfte - sie kam von denen in der Stadt, die das Feuer vor
 073(2) : gerade über dem Feuer lag, lange so stark, daß man vermuthete, das
 073(3) : Feuer liege im Fußboden verborgen, und überall aufbrach, und da
 081(31) : so ist vollends Feuer im Dache. Eins ist aber übrig, das Sie mir nicht
 087(25) : Gnade in's Feuer. Überhaupt, wenn nicht die Nachwelt meine Richterin
 132(9) : es nie in der Hize. Überdenke kalt ! und füre mit Feuer aus ! - Ich
 140(3) : Feuer und einer Bestimmtheit, deren Vereinigung mir Armen one diß
 227(10) : das Feuer jugendlicher Thätigkeit, die in's Unendliche geht,
 253(22) : gehaltner Seele geschieht, und uns das stille, stete Feuer belebt, das
 337(1) : Feuer, um sich griffen, und alles Todte, Hölzerne, das Stroh der Welt
 337(15) : Feuer ergriffen wird, wieder zu Feuer wird, so wie es aus Leben und

- 337(16) : Feuer hervorgieng. Und gönnen sie die Nahrung nur gegenseitig einander,
 380(20) : ins Feuer haben willst. Gabe mir nur ein Gott, so viel gute
 426(2) : Feuer vom Himmel. Eben deßwegen werden diese eher in schöner
 432(8) : Das gewaltige Element, das Feuer des Himmels und die Stille der

左端の数字は、Stuttgart 版大全集の第6巻（書簡集）⁵⁾の頁数を、それに続くカッコ内の数字は、その頁の上からの行数を示している。

まずは、これらが、いつの時点で、誰に宛てた手紙の中で、どのような意味で用いられているのかについて順に見ていくことにしたい。その際、上に記した1行だけではなく、それに関連する前後の部分も加えて、手紙ごとに見ていくことにする。（以下、Feuerの例の行頭に丸数字をつける。また、下線部は筆者による。）

書簡1.

72頁から73頁、すなわち①から⑦までは、最初に挙げた、ヘルダーリンの妹リーケに宛てた手紙で、1791年12月5日から12月10日の間に書かれたと推測されている。先にも触れたように、チュービンゲンの神学院で火災が発生し、それに遭遇したそのときの模様を妹に知らせたものである。もちろん手紙はそれ以外の事柄についても若干書かれてはいるが、この火災の件が中心となっている。

①072(5): Lezten Samstag nach 9 Uhr Abends gieng Feuer aus im Kloster.

「先週の土曜日、午後9時過ぎに修道院で火災が起こった。」

ここに言われている先週の土曜日とは、12月3日であることがわかっている。火の出た部屋は、「旧館の、久しく使われていないで部屋で、中には藁がいっぱい置かれていた。通りがかりの人の持つ照明の火花がその藁に飛び移ったらしい。（と言うのも、その部屋には扉がなかったからだ。）」ヘルダーリンはちょうどその旧館のある部屋を訪れていた。騒ぎに気付いて彼らは部屋を飛び出し、階段を下りて廊下に出た。

②072(16): wir schon am Ende des Ganges den wir erreicht hatten, Feuer zu der

「僕たちは廊下に出たが、その端のところで、もう既に火が、その部屋から吹き出しているのを見た。」彼らは現場から避難するのではなく、協力し合って消火活動をする。「炎は既にバルコニーに燃え移っていた。」

③072(19): und durch Feuer und Rauch war schon mein guter Rotaker

「すでに火と煙の中を通り抜けて、僕と仲良しのロターカーと他の数人が走って行って、燃えている藁の上にドアを投げ伏せ、部屋の中から物を取り出していた。」ヘルダーリンとその他の者たちもちろんじっとしていたのではない。

④072(23): um Wasser, denen die im Feuer standen wenigstens so viel möglich

「水を取りにとんでいき、火に直面している人たちに、できる限りの手助けをした。」

⑤072(25): schrien um Hülffe - sie kam von denen in der Stadt, die das Feuer vor
 「ぼくたちは、助けを求めて叫んだが、火に気付いた町の人たちが助けに来た。」
 「しばらくして、消えたという叫び声をした。」

次の⑥と⑦は連続している。

⑥073(2): gerade über dem Feuer lag, lange so stark, daß man vermuthete, das

⑦073(3): Feuer liege im Fußboden verborgen, und überall aufbrach, und da

「しかし煙は、ちょうど火の出た上の階にまだ強く立ちこめていたので火が床の中に潜んでいる
かも知れないと、あちこち破ってみたがそこには何もなかった。」

この手紙の最後に、ヘルダーリンは、ひとこと「僕は白状するが、このような不幸について想像していたほどには驚かなかった。」と付け加えている。

ヘルダーリンの「火」の意味を考えると、この火災の体験は、いわゆる原体験のひとつとして彼の記憶の内奥に深く刷り込まれているのではないかと思われる。

書簡2.

⑧081(31): so ist vollends Feuer im Dache. Eins ist aber übrig, das Sie mir nicht

これは1792年11月の後半に書かれたと推測されているヘルダーリンの母宛の手紙である。

ヘルダーリンはまだチュービンゲンの神学院にいるが、この手紙の冒頭で自分自身の性格について少しばかり触れている。すなわち、「自分の青春の熱中はメランコリーの道をとってきました。今はこの熱中が少し消えかかっているように思われますが、ふさぎ込むこともまた起こらないように望んでいます。人はかなえられることのない願望や夢で多くの貴重な時間を無駄にしています。そしてそれが満たされないと、まったく頭に火がつかます。しかし、あなたが承諾されないであろう一つのことが残っています。」

ここは、Feuer im Dache sein（いらいらする、頭がかつかとなるの意）という一般的な熟語的用法であると考えられる。

書簡3.

⑨087(25): Gnade in's Feuer. Überhaupt, wenn nicht die Nachwelt meine Richterin

1793年7月に書かれた、友人ノイファー（Neuffer）宛の手紙。『Hyperion』の断片について触れている部分。

「ぼくは君に厳かに約束する。もし僕のヒューペリオンの全体が、この断片より3倍もよくならなければ、情け容赦なく火の中に投げ入れられなければならない。とにかく、もし後の世がぼくの裁判官になるのであれば、また、もしぼくがそのことをすぐに予言的な確実さで言うことができなければ、ぼくは君と同じように、ぼくの七弦琴のすべての弦を切って、それを時のがれきの中に葬ろう。」

書簡4.

⑩132(9): es nie in der Hize. Überdenke kalt! und füre mit Feuer aus! - Ich

1794年8月21日付け。ヘルダーリンが最初に家庭教師を務めたシャルロッテ・フォン・カルプ

(Charlotte von Kalb) 家のあるヴァルタースハウゼン (イエーナ近郊) において書かれた弟カール (Karl) 宛の手紙。

「しかし賢明であれ。豚の前に真珠を投げるなどというのは金言だ。お前が行うこと、それを決して興奮状態で行うな。冷静によく考えよ！そして熱情 (火) をもって実行せよ！ぼくは確信しているが、兄弟がこんなふうに互いに話し合わなければならないと言うことでは、お前もぼくと同意見だと思う。」

書簡5.

⑪140(3): Feuer und einer Bestimmtheit, deren Vereinigung mir Armen one diß

1794年11月、イエーナにて、ノイファー宛。ヘルダーリンは、教え子とともにイエーナに来ており、シラーとの交流、フィヒテの講義の聴講などを行う。

「フィヒテは、今やイエーナの魂だ。(中略) 人間の知識のもっとも僻地にある領域に、この知識の諸原理を、そしてその諸原理でもって正義の諸原理を探求し規定すること、そして精神の同様の力でもって最も大胆で、最も飛び抜けた諸結果をこれらの諸原理から考え、それらを闇の力をもともせず書き、講義すること、しかも熱情 (火) と明確さをもつてだ。この二つのものの統合は、貧しいぼくにとっては、この例がなければおそらく解答不可能な問題と思われただろう。」

書簡6.

⑫227(10): das Feuer jugendlicher Thätigkeit, die in's Unendliche geht,

1796年11月、フランクフルトにて弟宛。ヘルダーリンは、前年の1月にヴァルタースハウゼンでの家庭教師の職を辞し、その後しばらくシラーのいるイエーナに滞在するが、5月末にいわゆる「イエーナから逃亡」し、故郷に戻る。その後12月に新しい家庭教師先、ゴンタルト (Gontard) 家のあるフランクフルトに到着し、翌1796年1月の始めにこの職に就く。これは、その年の11月の手紙である。

「お前は、お前が述べた信念の中に、無限に向かう若々しい活動の熱情 (火) と、自由な家庭の生活におけるその活動の制限とを、きわめて正確に美しく組み合わせている。」

書簡7.

⑬253(22): gehaltner Seele geschieht, und uns das stille, stete Feuer belebt, das

1797年11月2日付け、やはりフランクフルトから弟宛の手紙。この年の春には、小説『ヒューペリオン』の第1巻が刊行されている。やや長い手紙で、その冒頭に近い部分である。

「愛するカール！ぼくたちが行うすべてのことには、もしそれが節度ある魂でもって行われるならば、実に美しい栄えがある。そして、ぼくが、とくに古代のあらゆる種類の傑作の中に、支配的な性格として、ますます多く見出されると信じている静かな不断の火が、ぼくたちを生き生きとさせてくれる。」

書簡8.

⑭337(1): Feuer, um sich griffen, und alles Todte, Hölzerne, das Stroh der Welt

⑮⑯337(15): Feuer ergriffen wird, wieder zu Feuer wird, so wie es aus Leben und

⑦337(16): Feuer hervorgieng. Und gönnen sie die Nahrung nur gegenseitig einander,

ズゼッテ・ゴンタルト (Susette Gontard) 宛の手紙の同じ断片の中で。1799年夏、6月の終わり頃に書かれたと推測されている。彼女に密かに渡された手紙は、まったく残っていない。ヘルダーリンはこの時期、既にフランクフルトのゴンタルト家を去って、近郊のホンブルクに移っている。

「毎日、私は消え去った神聖を繰り返し呼ばざるをえません。偉大な時代の、偉大な男たちのことを考えますと、つまり、彼ら聖なる火が燃え広がり、この世のあらゆる死者や木片、藁などを炎に変え、それが彼らとともに天に昇っていったこと、それからまた、… (中略) …ある人の創造的精神が、他の人を食いつぶしてしまうのだと、人々が互いに怖れているのはなぜだか知っていますか。そのために彼らは、食べ物や飲み物は互いに喜んで与え合いますが、魂を養うものは何も与えないのです。そして、もしも何か彼らの言動が、他の人の中で、ひとたび精神的に把握され炎に化せられると、彼らはそれを我慢できないのです。愚かな人々です。あたかも、人々が互いに話すことのできるようなもの、それが、薪より以上のものででもあるかのように思っているのです。薪は、精神的な火に捕らえられてはじめて、それが生命と火から生まれ出たかのように、ふたたび火となるのです。人々が、ただお互いに糧を与え合えば、それこそ両者が生きて輝き、誰も相手を食いつぶしなどしないのです。」

書簡9.

⑧380(20): ins Feuer haben willst. Gäbe mir nur ein Gott, so viel gute

1799年12月4日付け、ホンブルクから友人ノイファーに宛てた手紙。その前半はノイファーの職業上の問題について、後半においては文芸、とくに詩的形式と古代の芸術作品について触れられている。その後半部の一部である。

「ぼくは君に少しばかり腹を立てていたと言うことも白状したいと思う。つまり、君がこの夏いちど (エミーリエのことの折りに) ポエジーに関してぼくに聞かせてくれた、かなり軽い発言についてだ。どうかぼくを理解してくれたまえ、親愛なる君！それは、全く軽い気持ちで、必要性和世話好きから走り書きされたエミーリエゆえにはなかったのだ。それは、君がぼくにとがめている芸術のためだったのだ。ぼくを冷たい理論家だと思いたければ思ってくれ。ぼくは自分が何を言っているのかわかっている。そして、もし君が、ぼくたちの一面的な諸概念でつぎはぎされた気の抜けた美学の概要を火にくべようとするなら、ぼくは完全に君と同意見だ。ぼくが洞察し感じているものを成し遂げることができるように、よい気分と時間とを神がぼくに与えてくれればいいのだが。」

書簡10.

⑨426(2): Feuer vom Himmel. Eben deßwegen werden diese eher in schöner

1801年12月4日付け、ニュルティンゲンから友人のベーレンドルフ (Casimir Ulrich Böhlendorff) 宛。ちょうどヘルダーリンが、フランスのボルドーへ旅立つ直前にあたる。手紙の冒頭に近い部分である。

「愛する友よ、君は正確さと優れた柔軟さにおいて、非常によく似たし、温かさにおいても失うところはなかった。それとは逆に、優れた剣のように、君の精神の柔軟性は、厳しい試練を受けてますます力強く証明された。これこそぼくが君に、何よりもまず祝福したいことだ。民族

固有のものを自由自在に使うことほど、ぼくたちが学ぶに難しいことはない。そして、ぼくが思うに、まさに叙述の明確さこそぼくたちにとって自然なものなのだ。ちょうどギリシア人にとって天の火がそうであるように。まさにそれ故に、ギリシア人は、あのホメーロスのな冷静さと叙述の才においてよりも、むしろ君が自分に確保した美しい情熱においてこそ越えられ得るだろう。」

書簡11.

④432(8): Das gewaltige Element, das Feuer des Himmels und die Stille der

1802年11月の後半に書かれたと推定されている手紙。これもベーレンドルフ宛。ヘルダーリンは既に5月半ばにボルドーを立ち、6月7日にシュトラースブルクを通過し、その後シュツットガルトに姿を現す。その年の11月である。手紙の冒頭。

「親愛なる友よ！

長い間、君に手紙を書かなかつたが、その間、ぼくはフランスにいて、悲しげな、寂しい大地を見た。南フランスの牧人たち、いくつかの美しいもの、また愛国心の強い疑念と飢えとの不安を抱いて成長した男や女たち。

強力な元素と、天の火と、人間の静けさ、自然の中での彼らの生活、彼らのつましさと満足、それが絶えずぼくの心を捕らえた。そして、人々が英雄たちにならうと言うように、ぼくはこう言うことができるだろう、アポロがぼくを打ったのだ。」

Ⅲ.

次に、手紙の中で用いられたこれらの火 (Feuer) という語の意味内容を考察するに当たっては、Jochen Schmidtが、怒り (Zorn) の概念について論じたときの方法にならって、⁶⁾ Feuerが、用いられあるいは出現する領域を見ると、およそ次の3つの領域に分けることができる。

1. 自然、あるいは人間の生活領域
2. 人間、あるいは英雄などの内部の領域
3. 神々、あるいは天上の領域

1.

最初の、自然や人間生活の領域の例は、①から⑦までの修道院における火災、⑨の『ヒューペリオン』断片を火の中に投げ入れて燃やす例、それに⑩の気の抜けた美学の概要を火にくべる例である。これらの火は、人間の外部の火であり、物を燃やして灰と化してしまう。すなわち物質を無化するのだから、物質そのものにとっては否定的な働きを持つ。しかし、この無化作用が人間にとっても否定的かどうかについては、火が、人間の制禦の下にあるかどうかによって異なると考えられる。修道院における火災も、その原因は、文面からだけでは必ずしも明白ではないが、通りがかりの人の持つロウソクの火が、藁に燃え移ったものとすれば、もともと人間の制禦の下にあった、人間にとっては暗闇を明るく照らす肯定的なロウソクの火が、その制禦の手を放れて人間にとっても否定的な火災の火となっている。また、⑨と⑩の例にしても、思想内容を、それが書かれている紙を燃やすことによって、紙だけではなく、思想内容をも無化することは、紙およびそこに書かれた思想そのものにとっては否定的な意味を持つが、それらの無化を望む人

間にとっては積極的・肯定的な意味を持つことになる。

古代ギリシア・ローマ大事典の“Der neue Pauly”⁷⁾においては、火の意味を5つの場合に分けているが、その1の実生活上の火が、上記の火に該当する。その2は、プロメーテイスなどのギリシア神話における火である。ヘルダーリンは、ギリシアの神々の世界、そして、その神々の世界と地上の人間の世界とがひとつとなっていた古代ギリシアの世界をあれほど強く憧れ続けたにもかかわらず、神話におけるプロメーテイスについては、不思議とも思えるほど関心を寄せていない。ヘルダーリンは、プロメーテイスについての一編の詩どころか断片さえも残していないのである。これは、プロメーテイスに強く執着したゲーテとは非常に対照的であると言わざるをえない⁸⁾。ヘルダーリンが異常に強く執着したのは、むしろ、生活上の火とは直接関係のないディオニューゾスやヘーラクレス、あるいはアキレーウスといった半神であり、イエス・キリストをさえその中に組み入れようと試みて、ギリシア的な汎神論を修正しようとさえしているのである。⁹⁾ プロメーテイスの火は、実在的な自然の火であって、ヘルダーリンが多く問題にしている、次に述べるような人間内部の精神的な火ではない。このことがこのような結果となって現れているのではないと思われる。Paulyの第3の場合は、ギリシア宗教に関してのもので、本来死すべきものを火によって不死なるものに浄化する作用をあげている。ヘルダーリンは、自然の、実在する火については、この浄化作用の意味を火の概念に含めて使っている例は、少なくとも手紙においては無いと言えるが、後に述べるように、人間内部の、精神的な意味においては、この浄化作用、永遠化作用を含めて火の概念を考えていると思われる。Paulyの第4は、ギリシア哲学に関するものでエンペドクレースの四大元素などが含まれ、第5はローマの宗教に関するものである。

2.

次に第2の領域、すなわち、人間、あるいは英雄等の内部の領域の例は、⑧願望が満たされず頭に火がつくこと、⑩事柄を賢明で冷静に考え、熱情（火）をもって実行すること、⑪フィヒテが講義に対して持つ熱情（火）と明確さ、⑫無限に向かう若々しい活動の熱情（火）、⑬古代のあらゆる種類の傑作の中に支配的な性格として見出される静かな不断の火、⑭かつての偉大な時代に偉大な男たちが持っていた聖なる火、そしてそれが他に燃え広がっていったこと、⑮から⑰は、精神的な火に捕らえられて初めて、薪（＝人）は生命と火から生まれ出たかのようにふたたび火となること、という例である。これら人間内部の火は、いわば「身体的な火」と、ヘルダーリン自身の言う「精神的な火」とに分けて考えることができる。「身体的な火」とは、すなわち命の根元としての火、その火が燃え尽きる時に命は絶えると言うような、死に神のメールヒェンにおけるロウソクの火¹⁰⁾のようなものである。しかし、上記の手紙の中では、人間内部の火は、すべて精神的な火と考えてよいであろう。ただ、これら精神的な火は、自然の火の単なる比喩にすぎないのではない。もちろん、もしこれが自然の火と全く同じであるとしたなら、それこそG.バシュラールが「アルコールを飲む者は誰でも、アルコールのように燃えることができる」¹¹⁾例としてソッケの『熱素論』から次のような例を引用しているが、すなわち、「1763年頃、ロンドンの『記録年鑑』（18巻78頁）は、一年半の間、ずっと毎日1パイントのラム酒或いは火酒（ブランデー）を飲んでいてアルコール中毒気味の五十才の一婦人の例を報告している。彼女はベッド・カバーやその他の調度品が殆ど傷んでいないのに、暖炉と寝台の間で灰となって発見された。」¹²⁾というようなことが現実となりかねない。しかしまた、比喩であるからには、何らかの共通する意味、意味の通底性といったものがなければならないであろう。

そもそも自然の火は、摩擦によって生ずる熱から発する。その熱が高まり、煙と炎を伴って火が生まれると考えられるが、そうだとするならば、精神的な火も、何らかの精神的な摩擦から熱が生じ、それが高まって精神的な火となると考えられる。摩擦とは、少なくとも2つ以上の相対するものが抵抗力を伴って擦れ合うことである。すなわち2者の対立、あるいは何らかの葛藤がそこには存在し、それが擦れ合って熱を生じ、さらにこうじて火を発することになる。上の例をもう一度振り返ってみると、⑧は、自らの願望とそれを実現させまいとする現実との間での摩擦、⑩は、現実の事柄とそれを実行しようとする意志との間の摩擦、⑪は、素朴実在論的哲学とフィヒテによる自我の哲学との間の摩擦、⑫は、無限性とそれに向かって突き進もうとする若者の活動力との摩擦、⑬は、例えば古代ギリシアの悲劇における神々の意志と人間との間で繰り広げられる摩擦、⑭は、例えばホメロスの時代に、神々の意志が介在する中で、英雄たちの互いに強力な戦いの意志のぶつかり合いによる摩擦、⑮から⑰は、そのような人間内部の火が、一人の人間から別の人間へと移って燃え広がっていく様子、と考えられる。これらの内⑬⑭における英雄や人間たちは、天に昇ってしまっただけでこの地上にはいないことが手紙の中で述べられている。また、ここで言う摩擦によって起こる熱は、単なる熱ではないことも注意しなければならない。単なる熱 (Hitze) については、ヘルダーリンも弟宛の手紙の中で次のように言っている。(例⑩)「それを決して興奮状態 (熱) で行うな。冷静によく考えよ！そして熱情 (火) でもって実行せよ！」単なる熱は決して火とはならない熱、熱に終わる熱である。あるいは、火となる前の段階とも考えられるが、その段階では不十分なのである。摩擦によって生ずる熱は火とならねばならない。そのような熱は、高度で、純粋であり、聖なる熱でもあり、そのような熱こそが聖なる火となりうる。

木片から発する自然の火は、木片そのものを無化する (灰と化す) のと同じように、人間内部の火 (精神的な火) も人間そのものを無化する。この点においても人間内部の火は自然の火の比喩として意味の通底性を持っている。ギリシア悲劇、例えばソフォクレスの悲劇の主人公たちの運命、また、ホメロスのイーリアスにおける英雄たちの運命にそれが示されている。ただこれが自然の火と異なるのは、精神の火は、この地上においては英雄あるいは人間を無化するけれども、天上において永遠化する。⑬⑭の例からそれがうかがえる。この点については、Paulyの第3の意味、すなわち本来死すべきものを火によって永遠化し、浄化する自然の火と意味的に共通性を持っている。また、⑭における、木片や藁などを炎に変えて火が燃え広がる喩えは、ヘルダーリンがチュービンゲンの神学院で体験した火災の体験の記憶が尾を引いているように思われる。

3.

第3の領域、すなわち、神々、あるいは天上の領域に関する例は、⑲のドイツ人にとって民族固有のもの、自然なものとは、叙述の明確さであり、ギリシア人にとってのそれは天の火である。という例と、⑳の南フランスの大地と人々に関しての記述、すなわち、強力な元素と、天の火と、人間の静けさ、自然の中での彼らの生活、彼らのつましい暮らしと満足、それが絶えずぼくの心を捕らえた。という例である。まず、ギリシア人にとって民族固有のものであり自然なものとしての天の火、この火は天上的なものでありながら、ギリシア人がそれを固有のものとして所有していると言われている。ここにおける「天の火」は、*das Feuer vom Himmel* と表現されている。これは「天からの火」とも解釈できる表現である。したがって、「天からの火が、ギリシア人の所有する固有の火であり、そしてその火は、ギリシア人にとっては天の火でもある。」と考えら

れないこともない。そうだとすれば、この火は、人間内部の火、ギリシア人固有の精神的な火であると考えられる。「天」とは、神々の住まうところであるが、ここでは、この天という語は、神々を意味していると考えてもよいであろう。ソフォクレスの悲劇、ホメーロスの叙事詩などにおける神々の意志と人間（あるいは半神）の行為との間で引き起こされる摩擦、それによって生ずる純粋で聖なる熱、さらにそれが高まって炎を伴い火となる。人間と神々とによって引き起こされる火、それは、まさしく聖なる天の火と呼ぶことができるであろう。だとすれば、この火は、ここに分類されるべきではなく、第2の、人間、あるいは英雄などの内部の領域における火に分類されなければならないものである。ドイツ人の特性である叙述の明確さと、ギリシア人の特性である天（から）の火とを対比させて述べているので、第1の、自然の火には分類することはできないからである。しかし、自然の火ではないにしても、次の例⑩と考え合わせて、これを太陽であるとも考えられるが、この場合においても、太陽すなわち神々の火が、ギリシア人固有の精神的な特性となるためには、やはり上に見たような、神々との精神的な摩擦が不可欠ではないか。その点において、ギリシア人の精神的な火は、神々の火によって点火された火であるとも言えるだろう。

最後の例⑩についてはどうであろうか。これについてJochen Schmidtは、「アポロ (Apollo)」および「強力な元素 (gewaltiges Element)」と関連づけて、天の火を持つ太陽神アポロと捉えている。そして、「アポロが打った」英雄たちとして、例えばホメーロスの『イーリアス』におけるパトロクロスの死、ヘルダーリン自身の翻訳から、オイディプスが自ら両眼をえぐり出す行為をあげている。¹³⁾ また、Adolf Beckもヘルダーリンのボルドーからの帰郷に際して、強い太陽の日差しが彼の神経を脅かしたのではないかと推測している。そしてヘルダーリンにとってアポロは宇宙的・精神的原理の体现であり、すなわち「強力な元素」「天の火」であるが、それに無防備でさらされる人間の魂を消耗させ脅かす。この力に詩人は、古代的な地を旅する中で古代の英雄たちのように打たれたと感じている。と推測している。¹⁴⁾ 「天の火」は、太陽神アポロの火であると捉える以外になさそうである。ただ、このアポロの火は、人間にとってただ単に外部的な自然の火であると考えられているのではなく、人間内部の精神的な領域に関与し、摩擦を引き起こし、火となって内部で燃焼し、炎となって燃え尽きる。しかし、この天の火によって人間あるいは英雄たちは死すべきものから不死なるものへと永遠化され浄化される。

IV.

ヘルダーリンにおける「火」の意味を解明するために、詩の言葉の中においてではなく、まずは、彼の日常の言葉、すなわち手紙の中においてこの語がどのような意味で、あるいは意味関連の中で用いられているのかを考察してきた。その際に火を発生させる過程として、「摩擦」と言う現象をいわばキーワードとして、その摩擦の内容を考察し、その摩擦によって引き起こされる火の特性にいくつかの種類があることを見てきた。本論稿の目的は、はじめにも記したように、日常的な「火」の意味を分析することによって、ヘルダーリンの詩の中における「火」の意味の特性を解明するための、なんらかの糸口を見出すことであった。はじめは、日常的な「火」の意味と詩における「火」の意味との間に大きな意味の隔りがあるように思われたが、以上の考察の中から両者の間にある共通性、意味の通底性が見えてくるのではないか。ここに、ヘルダーリンの詩における「火」の意味を解き明かす糸口があるのではないかと思われる。

30.10.2004

使用テキスト

- 1) Hölderlin. Sämtliche Werke, Große Stuttgarter Ausgabe. Hrsg. v. Friedrich Beißner, Stuttgart 1946-1985. (略記StA)
- 2) Friedrich Hölderlin Sämtliche Werke und Briefe in drei Bänden. Hrsg.v. Jochen Schmidt. Frankfurt a.M. 1992. (略記JSA)

注

- 1) StAVI, S.72ff. 及びS.595ff.
- 2) StAII, S.190ff.
- 3) StAII, S.197f. 特にMnemosyneのdritte Fassung.
- 4) Konkordanz zu FRIEDRICH HÖLDERLINS Briefen Substantive, Teil I(von A bis K). Bearbeitet v. Akihiko Tanase, Fukuoka 2003. S.142f.
- 5) StAVI, この巻の編集者は Adolf Beck である。
- 6) Jochen Schmidt: Der Begriff des Zorns in Hölderlins Spätwerk. in Hölderlin-Jahrbuch 1967 / 1968, Tübingen 1969. S.128ff.
- 7) Der neue Pauly Enzyklopädie der Antike. Band 4, Hrsg. v. Hubert Cancik und Helmuth Schneider, Stuttgart 1998.S.498ff.
- 8) GoetheのPrometheusに対する取り組みについては、カール・ケレーニイ著 (辻村誠三訳) 『プロメテウス』、東京1972. の特に第1章参照。
- 9) StAII, S.153ff. 及びRobert Thomas Stoll: Hölderlins Christushymnen. Basel 1952. S.40f.
- 10) Brüder Grimm Kinder-und Hausmärchen, München 1977. S.247ff. “Der Gevatter Tod”
- 11) ガストン・バシュラール (前田耕作訳) : 『火の精神分析』(改訳版)、東京 1999. S.153.
- 12) 同上、S.154.
- 13) JSA3, S. 919.
- 14) StAVI-2, S.1088.

Über den Begriff des Feuers in Hölderlins Briefen

Akihiko TANASE

Diese Abhandlung beschäftigt sich mit dem Begriff des Feuers in Hölderlins Briefen. Dabei soll dieser Begriff auf dem Hintergrund des Phänomens der "Reibung", aus der die Hitze, der Rauch und die Flamme, d.h., das Feuer entstehen, diskutiert werden. Das Verb "reiben" bedeutet ursprünglich, "etwas unter Anwendung eines gewissen Drucks auf einer Fläche kräftig hin- und herbewegen".

Hölderlin gebraucht das Wort Feuer in seinen Briefen auf den folgenden drei Gebieten, und zwar dem natürlichen Gebiet des alltäglichen Lebens, dem inneren geistigen Gebiet der Menschen und Heroen und dem himmlischen Gebiet der Götter.

Zum ersten Gebiet zählen zum Beispiel seine Briefe über den Brand des Stiftes in Tübingen, über das Verbrennen des Hyperion-Fragments und der faden ästhetischen Kompendien. Zum zweiten Gebiet zählen die Briefe über die Leidenschaft der Menschen und über das heilige geistige Feuer der Männer in den großen antiken Zeiten. Zum dritten Gebiet zählen die Briefe über das Himmelsfeuer, die Sonne des Apollons, d.h., das göttliche Feuer als solches.

Hier können wir eine grundsätzliche Gemeinsamkeit der Bedeutung des Feuers auf allen drei Gebieten finden. Einerseits erzeugt z.B. die physikalische Reibung von zwei trocknen Hölzern das reale natürliche Feuer. Andererseits erzeugt die Reibung im inneren geistigen Gebiet einen Konflikt zwischen dem Geist zweier Menschen, oder zwischen dem Menschen und den Göttern. Der geistige Konflikt entzündet den Geist des Menschen und flammt als inneres Feuer auf. Die Götter greifen aus verschiedenen Gründen in die menschlichen Welt ein und versetzen so den Menschen in eine innere geistige oder körperliche Belastung. Falls der Mensch diese innere Feuer unter Kontrolle bringt, gibt es ihm auch lebensspendende Energie, ohne die er zugrunde gehen müsste. Obwohl der Mensch stirbt, wenn das Feuer in den Beziehungen mit den Göttern steht, verewigen und reinigen das göttliche Feuer und das Feuer Apollons ihn.